

パグウォッシュ会議と科学者京都会議

ラッセルは、湯川たちラッセル・アインシュタイン宣言の署名者と連名で、科学と世界の諸問題を討議する世界の科学者の会議の開催を呼びかけた。これを受けて、1957年にカナダのパグウォッシュ村で開かれた会議に湯川は朝永振一郎・小川岩雄とともに出席した。この会議が成功したので、継続することになり、今日に続くパグウォッシュ会議となった。海外でのパグウォッシュ会議への湯川の出席は1962年までの4回にとどまったが、その後もしばしば、原点を見失わないよう呼び掛けるメッセージを送り続けた。

パグウォッシュ会議からは、創設者の一人として湯川には毎回の議事録が送られてきていた。この議事録は市販されなかったため、非常に利用しにくかった。史料室では、広く利用できるよう、基礎物理学研究所図書室に移し、利用希望者に公開している。

1962年には湯川は、京都の天竜寺で、ラッセル・アインシュタイン宣言に共鳴する科学者・文化人の会議を、朝永、坂田昌一と主催した。この会議は、開催地の名を取って、科学者京都会議と名付けられた。この会の記録は『平和時代を創造するために－科学者は訴える』（岩波新書、1963年）としてまとめられた。科学者京都会議は1980年代末まで活動を続けた。史料室には、最初の会議趣旨と会議参加への呼びかけ（c094-014-008）からはじまる大量の資料がある。



湯川はさらに、1975年には、パグウォッシュ会議の原点に戻って議論をすることをめざし、京都で第25回パグウォッシュシンポジウム「完全核軍縮の新構想」を主催した。ところが会議準備を進めていた最中に2回の手術をうけ、静養を余儀なくされた。出席が危ぶまれる中で、開会演説の責任を果たすべく、車いすで開会式に参加し、力強いメッセージを読み上げ、核兵器によって安全を守ろうという考えがいかの間違っているかを訴え、「最終の目標はすべての国の安全がそれぞれの国の軍備を必要とすることなしに保障されるような、世界システムを樹立することです。この点に関して、私は、ラッセルやアインシュタインと世界連邦のヴィジョンを共にするものであります。」と述べた。この部分は、病氣静養中の湯川が最後までこだわって演説草案に手を入れたところであり、手書きの加筆原稿（c082-005-002）が、「重要」と朱筆をいれた大型封筒に入れて残されている。

よ び か け

私どもは、核兵器とその運搬手段の苦しい発達、限りのない軍備の競争から生じる不幸な事態を懸慮し、原子物理学者として微力ながら核競争の人類にもたらすであろう破局について、世の注意を喚起することに努めてまいりました。幸いにして、戦争を防止しようという広範な世論を背景にして、国連総会は1959年に満場一致をもって全面完全軍縮の必要性を認めましたが、更に今年に入つて18ヶ国軍縮委員会が開催されるに至り、軍縮実現のための地方策が検討されんとしつゝあることは、私どもの喜びとするところであります。またこれとやらんで、今年8月、国連において東西10ヶ国の専門家の討議がまとめられ、「軍縮の経済的社会的障壁」について開る見聞しが発表されたことは、私どもに新たな希望をもたらすものであります。しかしながらその反面諸大國間においては、依然としてけしきらしい核兵器競争が激げられている現状からも察せられるように、私どもの理想とする全面完全軍縮の実現への途上には、なお多くの困難がよこたわつていかにみえます。

私どもはこのような情勢のもとで、科学者としてだけでなく、広くいろいろな分野において指導的な役割をしておられる皆様にお集りを願ひ、この企人類が何としても勝たなければならない問題について、いろいろな観点、いろいろな立場からの御意見をうかがひ、卒度で自由な討論を行つていただくことが、現在必要であり、また有効であると考えたに至りました。

周知のごとく、この問題に関しては、團協的には Russell 卿と Einstein 博士の声明にもとずくいわゆる Pugwash 世界科学者会議が既に4回におたつて開かれて、米ソを含む東西の科学者が国籍・イデオロギーの相違をこえて真摯な討議をおこなつております。この会議が基本的な観点について高度の意見の一致をみせたことは、戦争の防止と平和の創造に大きな役割を果たしたものと信じます。

私どもがこの際、別紙のごとき会議を計画いたしましたのは、日本においても Pugwash 会議のような性格をもつ会議を開くことが現在の情勢のなかで極めて重要であろうと考えたからであります。

御多忙中とは存じますが、この会議の重要性をお認め下さいまして、是非御参加下さいませよう、お願い申し上げます。

1962年8月18日

湯 川 秀 樹
 副 永 兼 一 郎
 坂 田 昌 一

25th
 Pugwash Symposium
 Kyoto
 28 Aug. 21 Sept.
 1975

① Opening Address
 ② List of Participants
 ③ Yukawa's Paper
 Thoughts of Nuclear Disarmament
 ④ Statement, Kyoto Conference of Scientists 1962
 ⑤ R.E. Manifesto 1955
 ⑥ Y.T. Manifesto 1975

BOX 67

科学者京都會議「呼びかけ」c094-014-008 Pugwash シンポジウム関係書類の「封筒」

Draft

Yukawa
 Opening Address
 Aug. 28, 1975
 Hideki Yukawa

*Pugwash friends,
 distinguished guests, ladies and gentlemen:
 as sponsored by Prof. Toyoka*

private I have been ill and in the hospital since May of this year. I have undergone operations twice in June and July. I am still too weak to participate in the discussions of the sessions of the Symposium, because of the aftereffects of the disease and operations. However, I came here since I think it my duty to say a few words of greeting to welcome our friends from abroad, on behalf of Japanese Pugwash group. The present Symposium is rather small in scale with a limited number of participants, but I believe that we may be able to make it very significant. In order to do so, we must first reflect on the spirit of the Russell-Einstein Manifesto of 20 years ago. It was novel because it was called for an international conference to be held by scientists for the survival of mankind. It was novel in denouncing all wars and aiming at the abolishment of ~~war~~ nuclear weapons, because there was always the possibility for any war to develop into nuclear war which leads to the destruction of mankind.

In response to the Manifesto, the Pugwash conferences and symposia have been held many times since 1957. Nevertheless, we find ourselves not in a position to praise our success, but we have rather to grieve over our lack of efficacy. This is because we have failed to stop nuclear arms races. In particular, two

-3-

the Symposium.

Other main themes of the Symposium are the morals and the social functions of scientists and engineers. But I leave them to the discussions of the forthcoming sessions. Instead, I would like to conclude my talk by expressing my personal vision about the future of mankind. Although it is necessary for the survival of mankind to achieve nuclear disarmament, it is also clear that the nuclear disarmament is a part of what we must achieve. It is to be a vital part of the general and complete disarmament. Even the latter is not the whole of our aim. The final goal is to establish a world system in which the security of all countries without their own armament is guaranteed. In this respect, I share with Russell and Einstein the idea of world federation. However, irrespective of whether one has such a vision in mind or not, I think we agree in the necessity of achieving nuclear disarmament. I believe that we all agree that the nuclear weapons are our common enemy and the complete abolishment of all of them is the only way to save the world from the earth is the goal to which we are aiming. I sincerely hope that the concrete proposals in the forthcoming sessions will make an effective contribution to achieve nuclear disarmament.

シンポジウム「開会あいさつ」原稿 (c082-005-002) 第1, 3頁。加筆の跡が見える。

1981年6月には京都で第4回科学者京都会議が開かれた。この日、体力が落ちていたにもかかわらず、十分な気力で出席し、出席者を前にして力強いメッセージを述べた。この会議では、「各国の軍備を必要としない世界システムの樹立」を目指す湯川の年来の主張が支持されて、会議の声明に盛り込まれた。病床にありながら主張を曲げることなく「道は必ず開ける」と確信していた湯川だったが、3か月後に永眠し、このメッセージが全人類への遺言となった。(文責：小沼通二)



車いすで出席した第25回バグウォッシュ・シンポジウム
(京都、1975年8月28日)で開会の挨拶をする湯川

参考文献

- 1) 河辺六男・小沼通二：「湯川記念館史料室私記」、素粒子論研究 65 巻 4 号 (1982 年 7 月) pp.223-237
- 2) 小沼通二：「中間子論誕生の歴史的資料の発見」、自然 1980 年 10 月号 p.69
- 3) 河辺六男・小沼通二：「中間子論の誕生」、日本物理学会誌 1982 年 4 月号
- 4) HAYAKAWA Satio: The Development of meson physics in Japan, in “The birth of particle physics” Ed. by L. M. Brown and L. Hoddeson, Cambridge University Press, 1983
- 5) 早川幸男：「日本における中間子物理学の発展」、『素粒子物理学の誕生』(L. M. ブラウン、L. ホジソン編、講談社サイエンティフィック、1986) pp.86-112

- 6) Proceedings of the Japan-USA Collaborative Workshops “Elementary Particle Theory in Japan, 1930-1960”, Progress of Theoretical Physics, Supplement Number 105, 1991
- 7) 湯川記念館史料室の史料目録 京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室委員会 2007年5月
- 8) “Hideki Yukawa Scientific Works” edited by Y. Tanikawa, 岩波書店、1979
- 9) 湯川秀樹著作集 全11巻 岩波書店
- 10) 湯川秀樹：『旅人』、角川ソフィア文庫
- 11) 湯川秀樹日記 昭和九年：中間子論への道、小沼通二編（朝日新聞社、2007）
- 12) 小沼通二：「1930年代の学会誌への論文投稿：湯川秀樹の中間子論文の場合」日本物理学会誌 65、452（2010）
- 13) 湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一 編著：『平和時代を創造するために』、岩波新書 1963
- 14) 湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一 編著：『核時代を超える』、岩波新書 1968
- 15) 世界平和アピール七人委員会編：『世界に平和アピールを發し続けて 七人委員会 46年の歩み』、平凡社 2002
- 16) 『世界連邦運動二十年史』、世界連邦建設同盟 1969